

都市政策・地域経済ワークショップ1 第10回 議事録

【テーマ】都市再生にかかる地域開発の諸事情～日常業務と研究の観点から～

【講師】大阪経済大学経済学部 准教授 白田利之

担当教員：永田潤子

【日時】2024年11月29日（金）18:30～20:20

【場所】大阪公立大学大学院 都市経営研究科 梅田サテライト 101教室

【参加者】都市政策・地域経済コース M1 学生 他

■ 講義概要

経験をもとにした社会人大学院での学び方と現在の研究について

■ 講義内容

1. 講師プロフィール

大阪市役所・大阪府庁に勤務し、24年間に12か所の部署を経験

（大阪市立大学大学院創造都市研究科1期生）

現在は大阪経済大学経済学部准教授として勤務

2. 社会人大学院の経験と現在の研究について

現在は、経済学部で都市縮小時代のまちづくりを研究している。

大学時代は、地震工学を研究していた。卒業後、大阪市に技術職として採用され、インフラ施設の耐震設計や津波シミュレーションなど、大学で学んだことを活かして業務にあたった。港湾の長期計画の策定を担当した経験から、政策立案を学術的に学びたいと考え、新たに設置された大阪市立大学大学院創造都市研究科に1期生として入学した。

修士課程では港湾の広域連携に関する研究を行っていた。論文を書き進めるうちに、研究範囲が技術、制度や法律と幅広く、限られた時間内ではまとめきることができなくなった。そのため、2年次の後半に研究テーマを港湾の防災対策に変更し、何とか論文を書き上げた。

博士課程では、港湾の広域連携をテーマに研究を進めていたが、大きすぎる研究テーマを取り扱うことの難しさを実感し、大学院2回生のワークショップで興味を持ち、業務でも担当していたPFI（Public Finance Initiative）に研究テーマを変更した。より具体的な研究テーマに変更したことで、多数の査読論文を書き上げることができた。一方で、博士論文の執筆時には、これらの個別の論文を博士論文にまとめることに苦心した。研究当初から研究計画をしっかりと考え、個別の論文を博士論文にどのようにまとめるのかを考えておく必要があった。

博士課程修了後、業務においては政策立案や都市計画を担当した。なかでも、うめきた2期の開発や大阪・関西万博、夢洲の開発などでは大学院で身につけた知識がとても役に立った。

日常業務と日常生活を両立しながら、社会人大学院で学び、論文を書くのはとても大変ではあるが、得られることも多い。日常業務にがんばって取り組むことで、職場の理解や協力を得ることができる。

社会人大学院で異なる業種や年齢の同級生等と議論することは、得難い機会である。大学院修了後も、積極的に同級生等とつながりを持つことはとても大切だと思う。

3. 地域開発とタワーマンション

タワーマンション（超高層マンション）の研究に取り組むことになったのは、うめきた2期の開発を担当しており、開発でタワーマンションの導入が想定されたためである。当時マンションの大規模修繕が社会問題となり始めていたが、タワーマンションの研究は、ほとんどされていなかった。そこで、自らタワーマンションの大規模修繕の研究を開始した。研究を通じて、タワーマンションの修繕積立金額が国のガイドラインの目安額を満たさないものが、多数あることを明らかにした。タワーマンションは都心部の有効な居住形態であると考えている。タワーマンションは他の居住形態と比べ、非常に大きく、適切な管理が求められる。修繕積立金の引き上げにはマンションの所有者（区分所有者）の過半数の合意が必要である。区分所有者がマンションの適切な管理の必要性を理解し、適正に管理されたタワーマンションを将来世代に引き継ぐことが重要である。その一助に自分の研究が活用されればよいと思う。

4. 質疑応答

Q) 公務員としてかなりのキャリアをお持ちであるが、なぜ大学へ転職されたのか。

A) 仕事を続けることで多くの体験や経験などを得られると考えたが、一方で定期異動があり、興味のあることに取り組み続けることが難しいと感じていた。人生は一度きりであり、“JOB より JOY”を求めたいと思い、自分の興味があることを自由に研究できる大学に転職することとした。

Q) 論文の執筆において、どのようにテーマを絞りこめばよいか。

A) 大きすぎるテーマでは論文を書きにくい。抽象的な大きなテーマから、より具体的な小さなテーマに絞り込むことが大切だと思う。現在はインターネットで多くの論文が公開されている。興味のあるキーワードを検索し、多くの論文を読むことから始めるのが良い。研究テーマに関連する場所に行って、現地を見ることも大切であ

る。研究を進めていくには書きやすい部分から書いていくのが良いと思う。
社会人大学院の学生の研究テーマは課題解決に関係するものが多いように思う。私も大学院時代にある先生から「解決策はコンサルタントが考えることで、そのような論文は学術論文ではない」と言われたことをよく覚えている。「そもそも何が問題なのか」や「定義はどうなのか」といった前提を考えることが重要であると思う。

永田先生) ある先生は「日が昇ってから沈むまでのすべての現象を書こうとする学生が社会人大学院には多い。小さな水滴にも日が昇ってから沈むまでが映し出されている。そのような水滴、雨粒を見つけることが大切だ」と言っておられた。

Q) これまでの研究の経験を通じて、研究のフレームワークの作り方について教えてほしい。

A) 社会人大学院の学生であれば、実務を通じて疑問に思っていることを研究のきっかけにするのが良い。自分の問題意識に関連するような論文がなければ、それを研究することも研究になる。

研究のフレームワークは簡単には出来上がらない。フレームワークが難しいと感じるのはその通りであると思う。自分でブレインストーミングし、何度も何度も自問自答を繰り返して出来上がっていく。自分の中の問題意識と向き合い、自分の中の問いを深めていくことが大切であると思う。

例えば私が大学院の時に書いた論文に P F I の失敗事例を研究したものがある。なぜ成功したのかではなく、なぜ失敗したのかを研究することで、新たな知見を得ることもできる。

永田先生) 成功事例を学ぼうとする人が多いが、失敗事例を学ぶことで成功条件が見えることもある。中止した事例や破綻した事例を学ぶことは逆説的な成功のポイントを学ぶことができる。成功事例だと、どの要因が特に良いのか、ということが絞り切れない場合が多い。先進事例や成功事例だけからでは学べないことが多い。目的は何か、という自分の問いをしっかりと持つことで見えてくるものがあるのではないか。

実社会の出来事のほうが先端事例であることが多く、大学院で学ぶということはすでに社会で起きたことをあとから分析をするということになる。白田先生の場合は、社会人として経験したことを大学院で学んだ知識によってフレームワーク化することで論文としているのも特徴であると感じる。

Q) コンサルティングと研究は違う、という言葉が心に残っている。どうしても失敗事例を見ると助言したくなってしまう。論文を書くときにも解決策を考えてしまう

が、どうすればよいか。

A) 社会人大学院の学生は、日常の業務を抱えており、すぐに解決策を考えたいくなるのは仕方がない。研究では物事を客観的・理論的に考えることが求められる。研究と日常業務とは頭の切り替えが必要であり、仮説の立て方も変わる。

「何を明らかにしたいか」という問いが研究であり、「何を解決したいか」との問いがコンサルティングであると思う。解決策の検討にまで行かずに、まずは踏みとどまる練習が必要かもしれない。学術的な視点で物事をとらえることは、日常業務にもとても役に立つ。

以上

(議事録作成：都市政策・地域経済コース 修士課程1年 担当者名 安達 新)